

News Letter 第10号

2012年5月1日発行
発行人 主教 加藤博道
編集人 司祭 中村 淳

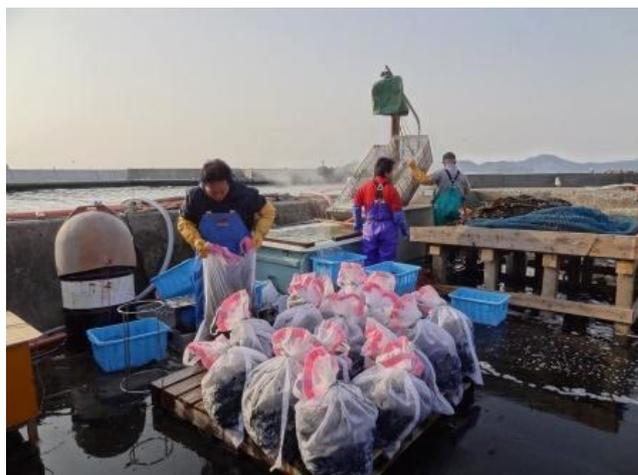


いっしょに歩こう！ プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援



「荒浜まどか」の繭玉製の復活の卵発送作業。
お蔭様で売り切れました。感謝！



わかめ収穫の手伝い。皆様から多数のボラン
ティア応募感謝いたします。(石巻市十三浜)

出会いから広がる支援の輪

仙台圏ベースの働き その2 (その1は2月発行の7号)



物資を持って被災信徒宅へ
2011年3月



ホームヘルパー2級講座
2012年3月



日本語学習会・志津川
2011年7月～12月



被災宅引越し手伝い・岩切
2011年5月



仮設集会所でのお茶会・新地
定期的に継続中



福島子どもプロジェクト
定期的に継続中

仙台圏ベース設立前の出来事

愛を分ける共同体

司祭 ドミニク 李 贊熙 (東北教区)

時間の流れはまことに早いようです。

この1年を回想して見れば1年という時間がどんなに早く過ぎ去ったのか、自覚できないほどです。

もう1年という時間が流れました。たぶん私にとって2011年3月11日は一生忘れることができない日です。いや私だけではなく、私たち皆に一生痛く、辛い記憶で私たちの胸中に残っていくことでしょう。

1年前に発生した大災害によって私たちの隣人はたくさんの痛みを胸に抱えながら、人生を送っています。愛する家族を自分より先に神様の国に送った痛み、今まで家族と一緒に愛の共同体を作っていた家、同僚と一緒に汗を流した職場、友だちと一緒に勉強した学校などを失ってしまった痛みなどが、今でも私たちの隣人たちを苦しめています。もちろん私にも一緒に日本で生活をした家族たちが、韓国へ帰国をしなければならなかった痛みがあります。1年経った今でもホジン(次男)は、地震の恐怖が残っています。そのため「日本は恐ろしい国」という考えを今もまだ持っています。

1年前、大災害発生直後仙台基督教会では、信者方々が無事であるかを確認するのに精いっぱいでした。通信が閉ざされた所が多くて確認するのに多くの時間がかかりました。

ある日、2人の女性信者さんが自動車のガソリンがないので、自転車に食料や水などの生活必需品を積んで、どこかに行くという話をしているのを隣で聞きました。実は未だに町の名前を聞いても場所がよく分からないです。ただ自転車で行くことができる近くの町と考えました。話を聞いた多くの方が無理だと言って結局タクシーで移動しました。もちろん私も一緒に

同行をしました。タクシーに水と野菜、米などをいっぱい積んで信者の方々の家の訪問が始まりました。「いやこの町を自転車です！本当に勇ましい二人の姉妹」という考えをするようになりました。二人の姉妹は本当に勇敢です…。

信者の方々家庭を訪問して安否を問うて、その方たちと話を交わして、必要な品物があるのかチェックをして一緒にお祈りを献げました。初めころは韓国語でお祈りを献げましたが、それ以降は日本語でお祈りを献げました。お祈りを受けた方々が涙を流して「ありがたい」といってくださいました。

1台につき10リットルまでだった給油がある日いっぱいまで給油することができました。自動車にガソリンをいっぱい給油して、その日からは、私の自動車で家庭を訪問して水と食物とそして神様の愛を分けました。

1年経った今考えて見れば、たぶんその日の奉仕が東北教区の***分かち合いの家**(支援活動)の始まりだったと思います。小さな実践ですがイエス様の愛を実践した経験だと思います。これからも私たちが少しでもイエス様の愛を分かち合える共同体になったらと思います。



今年3月12日、韓国の全国紙「朝鮮日報」に李贊熙司祭の働きが「東日本巨大地震：東北で支援に奔走する韓国人司祭」と題して紹介されました。(写真は当プロジェクトが提供。新地町にて撮影の昨年6月頃の写真。)

***編集部注「分かち合いの家(ナヌメチップ)」**
大韓聖公会の社会活動のひとつ。

仙台市内陸部被災地への支援

岩切での働き

司祭 フランシス 長谷川清純(東北教区)

2011年4月21日、復活日を秋田聖救主教会で迎えるため、私は東北道をオーガスチン号(プロジェクトに寄贈されたり、借りている車には愛称がつけられている)で走っていた。途中パーキングで休憩時、出がけにコンビニで買い求めた河北新報を開いた。そこに飛び込んできた一つの言葉が心に突き刺さった。「私たちは行政から取り残されています。」

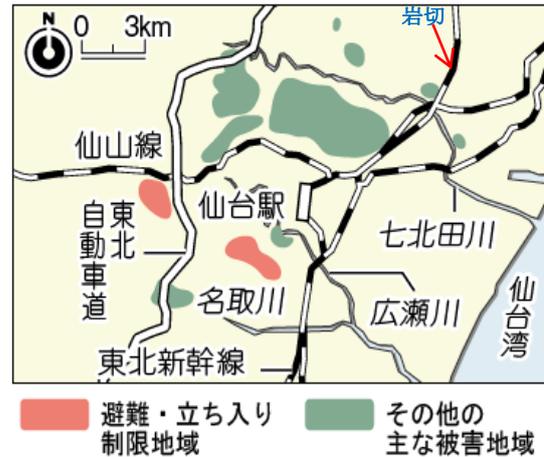
私は固まってしまった。その時まで被災地あちこちを掛けずり回っていたが、その全地域が津波被災地だった。取り残されたこの方は、仙台市内陸宮城野区だった。ショックだった。

仙台市宮城野区岩切 被災した家



復活日の翌主日、仙台市泉区の聖ペテロ伝道所で聖餐式後、私はその場所を訪ねた。一帯は全壊、大規模半壊と思われる家屋で点々としていた。新聞から場所を特定していたので、そこはすぐに判った。声を掛けた。ご夫婦は初対面とは思えないほど親しげに語り合った。これがスーパーハウスを提供する切っ掛けだった。今までに岩切地区8軒にプレハブ7棟が置かれた。現在各家々の解体が続く多くは今春、時間はかかるが順次改築予定だ。他方、建築できない方もいて辛い現実である。

仙台市の宅地被害地域



福島の子どもプロジェクト

スタッフ 岩本翔太(京都教区)

東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い多くの放射線が放出されました。しかし、放射線量がとても高いのにも関わらず、避難指定区域には入らず東京電力、及び行政からの具体的な支援が無い地域がたくさんあります。その一つに福島聖ステパノ教会があります。この教会がある地域も避難指定区域には属しません。子どもたちは正常ではない放射線量のため、外で遊ぶことはもちろん、外出さえ控えなければならない状況を強いられています。

そこで私たちの「いっしょに歩こう！プロジェクト」でこの教会の信徒さん一家、その友人と仙台で外遊びをする短期疎開プログラムを組みました。このプログラムは基本的に子どもにスポットを当て、東北教区の施設を使い一泊二日でその季節にあった外遊びを中心に、目一杯遊んでもらっています。普段あまり外で遊べていない子どもたちは芝生の上で寝転がったり、走ったり、本当に楽しそうに遊んでいます。

このような緊急的な物的支援ではなく、形がない支援はこれからの、生活のスタートへの支援としてとても重要であると考えます。また、

被災された方は、生活環境が変化するにつれ要望も変わっていくので、臨機応変にその時本当に重要な支援をこれからも続けたいと考えています。



仙台のスキー場で雪遊びです。

その他の仙台圏ベースの働き

名取市では、津波被害の大きかった同市閑上ゆりあげからの入居者が多い、同市内陸部の箱塚桜仮設団地に主にかかわりを持っています。住民の方から希望の多かった「買い物バスツアー」はすっかり定着しています。お年寄りが中心メンバーです。時々被災地である地元閑上、ある時は「スーパー銭湯」などにも寄り道したりします。



岩沼市の海岸にて

福島県新地町、宮城県南三陸町はすでに特集でもお知らせしましたが、最近の動きをお伝えします。

南三陸町志津川ではフィリピンからお嫁に来た女性たちが、ホームヘルパー2級の資格を取るために、まず日本語の読み書きから頑張っていました。その講座も終了しいよいよ病院での実習が始まりました。まず資格取得は間違いないでしょう。実習で頑張るお母さんたちのために男性スタッフが託児を引き受けています。微笑ましいです。



新地町の仮設住宅でも定期的に「お茶会」や最近では「映画会」も始まっています。どこの仮設住宅でもそうですが、高齢の方が閉じ籠りがちになっています。そんな方々にせめて部屋から出て楽しんでいただこうと、時には様々なタレントを持った方々のご奉仕をいただいてマジックショーやマッサージ、3月末には落語会も開催されました。活動2年目に入り新たな課題も出てくることと思います。これからもお祈りの内にお覚えください。(広報)

以下のURLから、ホームページも合わせてご覧ください。



「いっしょに歩こう!プロジェクト」事務局

【open】月～金 10:00～17:00 【close】土・日・祝

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル2F

TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321

E-mail: walk@nssk.org URL: http://www.nssk.org/walk/